

器の大きさ

2024. 9. 30

権力というものの危うさを教えてくれる話がある。ある国で、軍事クーデターが起こった。クーデターの首謀者である将軍は、民政を倒して独裁体制を敷いたのだが、そのクーデターを国民が支持しているかが気になった。

そこで、その将軍は、年寄りの労働者に変装し、多くの人々の集まる映画館に行ってみた。映画の前のニュース放映のときに、最近のクーデターが報道され、画面には、戦車に乗った将軍が登場した。すると、映画館にいた観客は、全員総立ちになり、将軍を褒め称える拍手を送った。

満場の観客が拍手する姿を見て、このクーデターは、国民から支持されていると感激して椅子に座り込んでいた将軍に、隣で立って拍手をしていた若い労働者がささやいた。おい、じいさん、拍手しな。拍手しないと、殺されるぜ。

思わず笑いを誘うような話である。しかし、一人の経営者として、この話を読むとき、それが、政治についての風刺であることを超え、経営についての警句であることに気がつく。なぜなら、経営者がその権力の危うさに気がつかず、無意識にその力を振り回すと、それは、必ずといっていいほど、部下や社員から社長の好む意見を引き出してしまうからである。

賢明な経営者は、そうした自分のもつ権力の危うさを知っており、それゆえにこそ、自分の傍らに、耳の痛い意見、不愉快な意見、自分の意に沿わない意見を述べる部下を意識的に置いておく。ある商社の経営トップは、「私は、いつも、可愛げのない部下を傍らに置いておく。耳の痛いことを言う部下を傍らに置いておく」「経営会議で、全員が賛成ならば、私は決めない。そんな意思決定は危ない」と語っていた。日本では、昔から、こうした経営者を器の大きな経営者と評してきた。

部下から耳の痛い意見、不愉快な意見を言われて、心に波風の立たない人間はいない。心の中には、自分の正しさを認められたい、自分の立場を守りたいといった思いがあるからである。この思いが強くなると、その部下の意見を一度深く受け止めてみるということができず、その意見に耳を閉ざしてしまう。

一方、自分の至らぬところを認め、自身のさらなる人間成長を求める思いもある。部下や社員の気持ちや立場を理解し、周りの人々を心で包み込める人間へと成長していきたいという願いである。器の大きさとはい、このような自身のさらなる人間成長を求める思いや願いのことだろう。

この話は、経営者に限ることではない。学校でも同じである。上に立つ者として、共通のことである。リーダーの器の大きさが、組織や集団の経営に影響を与えることがある。リーダーは、そのことを肝に銘じておかなければならない。